下関における戦後映画興行盛衰史／1957年編その一

倉　本　　昭

はじめに

地方都市の視点に立った戦後の映画史・映画興行史が必要ではないか。

高度経済成長期にあって、地方と中央とでは、興行の形態も異なっていた。テレビの台頭、大衆の娯楽の多様化、映画館同士の過当競争など、映画興行凋落の原因とされることも、地方の興行界では、東京とは微妙に異なった形で問題化していったはずである。しかし、日本映画史の標準的な参考文献は、地方における興行の様態について殆んど筆を費やさない。そこを補う研究が進み、日本の映画史・映画興行史を更にダイナミックな形で理解することが求められる。

また、地方の映画ファンの反応は、これまで大抵黙殺されてきた。地方都市の識者・見巧者の意見は、中央の評論家に比して遜色のあるものか。地方都市の人々は、その街でロケーションがあった場合や、その街出身の俳優が主演した場合、完成した作品に対して、東京の観客とは異なった反応を示したのではないか。そうして、その土地で市民が長く愛し続ける作品があるのではないか。以上のようなことも検証する余地がある。

ただし、地方都市に焦点を定めて映画史・映画興行史を論じる場合、忘れてはならないポイントがある。その土地の歴史・風土・都市基盤・基幹産業との関わりの中で、映画街形成の様相、興行の実態を述べることである。こうして、それぞれの都市の興行界の個性をあぶりだすことが、中央偏重の映画史・映画興行史を相対化していく一つの鍵となろう。

この課題に関する近年の最良の成果は、『日本映画は生きている』第3巻「観る人、作る人、掛ける人」（岩波書店　2010）収載のいくつかの論考によって読むことができる。また、福岡の郷土映画史家・能間義弘は、大著『図説・福岡県映画史発掘・戦前篇』（国書刊行会　1984）を上梓したあと、その戦後篇ともいうべき稿を『BACK TO THE MOVIES 福岡市の映画と映画館100年の歩み』中の「福岡市の映画と映画館100年の歩み　戦後篇Ⅰ　戦後篇Ⅱ」として完成させた（葦書房　1995　福間・廣瀬・近藤・有吉・武末・山口・松浦共著）。新潟の市民映画館鑑賞会は、2009年に『街の記憶 劇場のあかり　新潟県 映画館と観客の歴史』（月刊ウインド250号記念）、その別冊『新潟市昭和の映画館　写真集』を世に問うた。

現在、全国各地にフィルム・コミッションが設立され、盛んに活動しているから、これらが各地方都市の映画興行史編纂にも関心を寄せてくれれば、喜ばしい限りである。

さて、筆者は、これから、本州最西端の街・下関における高度経済成長期映画興行の実態を明らかにしていく。

この研究の目的の一つ目は、興行史上伝説的な、映画館の過当競争の実態を探ることである。『キネマ旬報』1958年秋の特別号（10月上旬号。No. 215）に載る「新・盛り場風土記　下関」に次のような記述がある。

ここの映画界は、日本でも有名な乱戦地で、何時も、問題を起している。いまだに、市の興行組合がない有様で、実は、今年の四月八日に一応、保良氏（邦楽座の座主）を組合長、樋口誠氏（邦楽座支配人）を事務局長として、二本だて料金一二〇円以上、その他を決めたが、いよいよそれを、六月十八日より、実施するという時になって、協定破りが出て、御破算になった。

ここは料金のダンピングが、非常にはやり、今年になってからも、三本だて一〇円と云う、破天荒のことが平気でまかり通ったところだから、驚くほかない。

現在は、やっと、最低二〇円まで引上げたが、封切二本立てで、七〇円というところはいくらもある。早く、よい組合が出来て、足なみを揃えねば、下関の映画界は健全な発達は出来ないだろうと、心あるものは心配している。（文・林逸馬　p.150）

ここで批判されているような劇場同士の乱戦は、どのように発生し、展開し、そして終息を迎えたのか。テレビとの競合、製作会社の濫作に加え、劇場の乱立と過当競争が、映画斜陽化の要因として注目されている昨今、この問題を探ることは、映画史・映画興行史に裨益するところ大であろう。

二つ目に―高度経済成長期において、山口県は映画製作・配給会社の関西支社管轄であったにもかかわらず、下関市だけは九州支社管轄であったという、「特別区」の問題。市内の劇場には九州支社が出入りするのに、市外周辺地域の劇場には関西支社の息がかかっていた理由は何か、管轄する支社の違いが劇場経営のあり方に、差違をもたらしたかどうか。

三つ目に―個性的な観客層の分析。下関においては、農業、漁業、そして造船・水産加工・非鉄金属を中心とした工業に従事する人々が厚い観客層を形成していた。たとえば、船員が目立つ劇場、農業・沿岸漁業従事者が多い劇場、商店街や市場の関係者が占める劇場など、それぞれに個性ある客層を抱えた映画館が存在していた。それらが産業構造の変化によって、いかなる消長を見せたか。

四つ目に―戦前の映画興行とのつながりを探ること。近代以降大陸と往来するための拠点として賑わった下関では、早くから映画興行が盛んであった。近年話題の金子みすゞは、市内映画館を詩材に「キネマの街」を創作している。そうした戦前映画街の賑わいが、戦後に、どのように受け継がれていったのか。

五つ目に―下関ゆかりのスターが街に及ぼした影響の検証。下関は田中絹代のほか、木暮実千

代、二村定一、ハヤフサヒデト、松田優作にゆかりの地である。そうした人々が、生前もしくは没後、下関の文化に対し、いかなる影響力を及ぼしたか。ハヤフサヒデトは市内で劇場支配人をしながら映画出演もし、俳優の仕事がなくなってもバーを経営しながら自主映画制作に触手を伸ばし、現在下関で活躍する文化人たちに関わった。田中絹代の顕彰は盛んで、「田中絹代ぶんか館」が運営されているほか、田中絹代メモリアル協会が市内に本部事務所を置き、花嵐忌を執り行い、恒例の「しものせき映画祭」を主催している。木暮の業績に対しても顕彰の動きがあり、建碑が計画されたり、回顧上映会が催されたりしている。田中・木暮は、女優として大成したのちも下関と無縁ではなく、全国的には知られていない、ローカルな話題もないではない。

下関には以上のようなことを調査・研究するにあたっての好条件が整う。地域史資料が比較的豊富で、中でも注目すべきは、映画に関する資料館が存在することである。一つは先の「田中絹代ぶんか館」(正式名称は近代先人顕彰館)。下関出身者・田中の貴重な遺品を所蔵する、日本初の単独女優記念館である。もう一つは、絹代ぶんか館から渡船桟橋まで歩いて、関門海峡を渡ってすぐ、福岡県北九州市門司区にある「松永文庫」。ここは九州有数の映画コレクターの全コレクションを一括所蔵していて、下関の映画館の劇場プログラムなど他では見られない貴重資料を有している。この二館のコレクションのほか下関市立図書館所蔵の地域史資料を駆使すれば、かなり充実した「下関映画興行史」が書けるのである。

かくして、筆者は戦後高度経済成長期下関の映画興行史を述べていくにあたり、まず1957（昭和32）年という年に注目した。それは、この年、皿倉山にNHK小倉支局が開局し、関門に本格的テレビ時代が幕を開けたこと。火の山ロープウェイ、総合競技場、農業試験場が完成に向い、市庁舎の委員会棟建築が進んでいたほか、道路整備が行われると共に路面電車の軌道も敷き直されていたし、漁港では東洋一の設備を標榜して上屋増設が急がれ、市街地の主要な通りには街灯が並びだし、高度経済成長期下関の都市基盤が一応の完成を見せる手前の年であったこと。亀山八幡宮復興社殿完成が近付くや、赤間神宮では本殿・祝詞殿に続く復興工事が始まったし、前年オープンした水族館では、ペンギンが話題をさらっていたほか、長府遊園地も開園。観光都市としての魅力もアップしつつあった。

都市基盤の充実で特に重要であったのは、関門国道トンネルが翌年、使用開始され、鉄道トンネルに次いで、下関が九州と海底でつながったことであった。これで小倉市の商圏の影響力が、いよいよ等閑視できないものになった。

57年は、まさに下関が大きく変わっていく境目の年であった。

57年には全国的に映画興行がピークにさしかかっており、翌年、映画観客数は戦後最高の数字を示し、以降漸減していく。観客数ピークの前年、下関の映画興行界はどうであったか。先に引用した『キネ旬』の記事を参照すれば、いわゆる「乱戦」が行われていたはずである。筆者はそこに、下関映画興行界の凋落の兆しを探ってみたいのである。

しかし、当時の興行界の実態を探る前に、まずは、1957年当時の下関市中心市街地の劇場街に

足を踏み入れてみたい。当時の劇場街周辺の様子を考証のうえ描写し、観客がスクリーンの世界を堪能する前後、何を見、何を聞いていたかを明らかにしていこう。下関の風土・都市基盤にまで留意しつつ劇場街の様相を描いていこう。

市内劇場街周辺を歩く

1
西之端・唐戸界隈から幸町あたり

唐戸は「からと」と読む。「ら」にイントネーションを置いて、現地では発音されている。北前船の寄港地で、山陽道の要衝であったため、江戸時代には大層賑わった。シーボルトが上陸し、坂本龍馬のほか高杉、久坂、伊藤といった幕末の英傑も闊歩した地である。

1957年当時においては、ここに集められた各種市場が繁盛を極め、賑わいを保っていた。

このエリアでの興行をリードしていたのが、OS劇場（OS東映）である。OSといっても、阪急・東宝系のオーエス映画劇場株式会社とは関係がない。地元資本の興行会社・OSチェーンの劇場であって、オーナー大津四郎の頭文字をとってOSと称したともいわれる。

OS劇場から反時計まわりに当時の街地を散策してみよう。

OS劇場が面する西之端（にしのはし）通を西に歩めば、指呼の間に大通りへ出る。出ずに右に折れると、教法寺・本行寺が甍を並べている。いずれも奇兵隊の逸話を伝える寺である。当時、両院の伽藍は南北に連なる小丘によって大通りと隔てられていた。この丘陵を教法寺山（戦前の市街図には法福寺山とも）といった。山の大通り側は、縦に削られ、切り立った面には横一列に大看板が並んでいた。麓の歩道には、屋台が三つ、五つと立った。後年のボヤ騒ぎで屋台が撤去されると、山を切拓くべしとする派の要望がかない、開発が進んだ。山が大きく削られた跡にはガソリンスタンドなどが建つ。大通りへ出る山側の角には、開発前の57年当時、文具店があったが、これも菓子店に変わる。

大通りを渡れば、戦災に耐えた名建築が三つまで並んでいた。一番手前で目立つ赤煉瓦の2階建ては日本生命下関支店(注1)。隣に下関商工会議所(注2)。細い道を挟んで、円いパラボラアーチの赤屋根が印象的な下関電話局(注3)。局の本館の脇を田中川が流れ、弁財天橋（べざいてんばし）がかかる。

西之端の電話局には電話交換手が160人勤めていた。うち夜勤は11人。朝は4時頃より、魚市場が繁忙状態の間、東京・大阪からの市外電話も入った。夜勤が交替する午前8時を過ぎて、10時に交換業務はピークを迎え、一時間に450回ほどの呼出ランプが点灯した。1日に5000回の応対があったという(注4)。

1957年のうちに下関局管内普及電話台数は、前年の8858台から9669台に至ったが、電話普及率は、人口100人当たり4.05％にすぎない(注5)。ただ電話の利便化は漸次に進んだ。

1956年、勝山地区青山の山頂にマイクロウェーブが設置され、福岡と大阪・東京・札幌とを結ぶ長距離電話と、テレビ電波の中継とが可能になっていた。58年２月には、下関電話局から大阪・東京への長距離即時通話を行う祝賀パフォーマンスが行われている。

57年７月、下関から門司・大里（だいり）・小倉・戸畑・若松・八幡・折尾の各局管内への自動即時通話が可能になった。交換手に相手の番号を告げる手間がなくなったのである。下関市中心市街地区内では、自動即時通話が1950年３月12日に早くも可能となっており、51年には彦島も自動即時通話網に含まれていたから、更なる前進であった。長府・安岡・吉見・勝山の各交換局管内にまでは58年に半自動即時通話網が広がり、翌年には、小月（おづき）・内日（うつい）交換局管内にまで半自動即時通話ができるようになった(注6)。

電話交換業務も転機にさしかかっていたわけだ。

それにしても交換手たちは想像しえなかった。来るべき世紀に、電話局の建物解体案をめぐって議論が沸騰し、結果、田中絹代の遺品や郷土文学資料を保存・展示する建物として、局舎が補修のうえ保存される（2010年）とは―。

西之端の大通りからは、聳え立つ市庁舎の塔屋が仰げた。また唐戸の三叉交差点を見やれば、そこに小公園(注7)が立ちはだかっていた。

公園は交差点中央寄りに設けられ、真ん中に白い時計台が屹立していた。時計は、この年の春に味の素提供により設置された服部時計店製のもので、「ウエストミンスターの鐘」のメロディをオルゴールで奏でていた。特に朝８時の報は、唐戸の子供たちが登校のため家を出る格好の合図であった。劇場の暗がりから出て、海峡の街に注ぐ夕陽の中へ身をひたす観客が、時計台のメロディで耳を洗われることもあった(注8)。

小公園の海側の向い、現在のグランドホテルの前あたりには、バス乗場。ホテルや高架橋は当時無い。バス乗場には1956年末、市衛生課自慢の公衆トイレが設けられた。戦後市内設置７ヵ所目である。コンクリート造、床の総タイル貼、完全水洗式は、当時としては先端をいった。施設前面にブロックのオブジェ(注9)もあって、市史赤表紙版に「中国筋第一と称される」（p.741）とすら見える。ところが年もあらたまり、松の内を過ぎた頃には、金具類が盗難され、戸は蹴破られ、ポスターが無許可に貼られ（ついでにいえば男女の別も無視され）、見るも痛ましい様になっていた(注10)。

下関駅前から伸びる路面電車の線路は、小公園にさしかかるあたりで前田―長府方面（東北方向）と西之端―東駅方面（北方向）へと分岐した。東駅に向う線は、小公園の東側―青果市場のあった側―に軌道を設けていた。公園の東から南にかけて、電車・バス・ハイヤー・オート三輪・リヤカー・人と、交通は煩雑を極めていたので、電車軌道を公園西側―秋田商会ビル側―に移設

する計画が、この年に出された。

長府方面からの電車が国道を下関駅方面に折れるあたりには、ポイント操作場が設けられていた。一本柱の上に箱が載ったような見かけが印象的であった。これと道路を挟んで向かい合う秋田商会ビル・下関東郵便局舎（現在の南部町郵便局舎）は、下関を代表するレトロ建築として今も健在である。秋田商会の並びに、やがて時計台を見下ろす形で山陽急行ビルが建って、屋上に「東芝テレビ」「東芝ラジオ」のネオン広告塔が輝いた。1960年版『善隣住宅詳細図』によれば、このビルにNHK下関放送局分室が入った。交差点に臨んで、現在旧英国領事館として修復・保存（重文）されている建物は、54年以来、市の所有に帰し、市場拡張案が叫ばれるなか、解体説がささやかれていた(注11)。

唐戸の港には関門汽船と関門海峡汽船との２つの桟橋があって、周囲には終戦後からの名残である木造建ての小店が立ち並んでいた。関門汽船桟橋―海峡汽船桟橋の東すなわち長府側―は56年９月の台風12号で破損し、翌年３月いっぱいにかけて補修が進められ、海峡汽船桟橋も老朽化対策の補強工事が、やはり３月初に終わった。かくて桟橋付近は、57年春まで雑然としていた。それでも唐戸の汽船は朝４時台唐戸発便の復路便から混み合った(注12)。鮮魚・青果・乾物などを商う者たちが大きな荷物を持って乗込み、市場と門司を往来したからだ。桟橋近くの国道沿いに立った関門汽船のビルは、1931（昭和６）年竣工以来、今も港の賑わいを眺めている。

桟橋の東側では、唐戸魚市場が大活況を呈していた(注13)。当時は「ふく」―下関ではフグとは呼ばぬ―も唐戸での扱いである。国道をはさんで向いには青果・バナナを扱う市場があった。魚市は早朝５時に開き、青果市場や南部町（なべちょう）の花市場(注14)も順次開いた。朝になると、あたりには、汐風に鮮魚や果実、野菜の匂いがまじったのである。魚市場の場合、1933年の開市以来、卸市場と小売市場を兼ねており、郊外漁村から直接漁獲物を売りにくることでも異色であった。今ホテルのある辺りでは露天でも市がたっており、小倉市中央卸売市場が完成する1958年まで、唐戸の「関門の台所」としての座は磐石であった。

大きなブリキ缶を抱え、市場に往きかう行商たちが、路面電車をすし詰め状態にする時間帯があった。下関駅に戻る行商たちと乗り合わせたら、悪路の砂ぼこりに辟易した長府方面からの乗客には、艱難が重なることになった。車内が蒸す夏場には過酷を極めたろう。電車を運行する山電（さんでん）は「荷物専用車」なるものを設け、行商たちと一般客とを分けようとしたが、行商はバス利用に走り、今度は山電バス・長門鉄道バスがクレーム対策を強いられた(注15)。

ここで、当時の唐戸における一日の平均的な交通輸送人数について記そう。山電バスでは千六百から多いときで三千人が長府方面から運ばれ、降り立った。北浦方面から来るものは約二千人。山電の路面電車は乗降客あわせて八千から一万人が利用。汽船は約五千人が門司との往来に使った(注16)。他に長門鉄道バス、山陽急行バスも来た。

交通量の激しい唐戸の信号機は市場関係者で混雑する時間には守られない。リヤカーは平然と電車の前をよぎっていた。そこで56年冬に信号機が新調された上に、１日３時間は巡査が交通整

理に出た。

そんなお膝もとの殷賑を、亀山八幡は、魚市場の対面の高台に鎮座して、見守っている。57年12月には復興新社殿が成り、山電のストと重なったにも関わらず、大勢の市民が参拝した。ここの大鳥居を擁する石段脇から交差点の方へ伸びるが如く、中央市場のコンクリート造2階建てビル2棟が横たわっていた(注17)。市場の2階部分の外観は印象的であった。定間隔に常夜灯が並ぶ屋上の欄干、縦に大きな矩形窓、さらに、その窓を仕切る飾り円柱が、互いに数学的な秩序と調和を保ちながら、東西方向に見渡せたのである。

市場ビル2棟の屋上をつなぐ太鼓橋を亀山橋という。戦災にも耐えた関の名物で、亀山への参道の一部としても機能していた。ビル屋上の欄干が玉垣に似せてあり、常夜灯が設けられたのは、参道ゆえである。屋上にかかる橋の下には、市場両棟の2階部分をつなぐ橋も架けられていた。上下二重の橋を人が往来する様は奇観であった(注18)。

橋の交差点側の市場2号棟2階には1960年までに下関映画協会事務所が入った。会長以下数千人という会員を有する、優秀映画の鑑賞・批評を目的とした組織であったらしい。またこの棟には地下飲食街があった。地下街では四周に店舗が入り、中央の空間にはバナナの室が設けられていたという。ここは夕刻からサラリーマンや公務員が利用し、午前2時頃には動き出す卸関係者も愛用したので、24時間営業に近かった。

亀山橋の下から真直ぐ北に伸びる赤間中央通は北浦街道の一部である。この通りを行けばすぐのところで、高度経済成長期には、大洋漁業がプロデュースした鯨料理店「日新」(1958年開店)が名を馳せた。大洋漁業の直売所が前身である。いまは唐戸ドームの下になった交差点に至れば、その北東角より一軒隣に袋物のうさぎ屋。そこから引接寺(いんじょうじ)のある方へ向って、下関会館ホテル(注19)・富田屋旅館につながる道を横目に見ながら行くと、すぐに若草劇場。そこで、劇場前の通りを若草通と呼んだ。劇場跡は現在市営駐車場である。明るいうちに若草を出た観客が、東の方に目をやると、引接寺伽藍の屋根越しに、丘の上の英国代理領事邸の白壁が望めた(注20)。

うさぎ屋から中央通を渡って西に行けば右手に中野書店があり、その向かいに丸食と公設市場、下関屈指の老舗・亀屋薬局などが並んでいた。書店の市役所側並び、パチンコ幸楽の隣に、やがてキャバレー「ニューヨーク」がオープン。若草劇場並びの「グランドバー　モナミ」(昼は喫茶)、本行寺脇の「バー　ハクスイ」(59年中にバー「スリーエー」となる)「銀鈴」(バーとサロン2軒)等も共に賑わいを見せた。この中野書店がある通りを赤間本通という。市庁舎に面してネオンアーチがあり、街灯と共に夜を彩った。中野の裏が路地をはさんでOS劇場であった(注21)。

OS劇場跡は、ますや(衣料)、関門ニチイ唐戸店などを経て、現在は、すし割烹やバーの入るアカマプラザビルである。劇場前は四辻で、57年当時、中央通を挟む向かいにクシベ洋服店、斜め向かいに音楽喫茶「こいぬ」があった。1951年創業以来、今も変わらぬ風情の喫茶こいぬは、鋭い三角屋根の破風に施す斬新な意匠が印象的である。全体としては、ドイツやイギリスの地方都市にある木組みの家のように、ハーフティンバーが特徴的なテューダー調のデザインを取り入

れ、1階部分外壁のレンガが与える落着きとあいまって、クラシカルな格調も見せている。ステップを設け、低まった店の奥に、ヴィクターの大スピーカーが配され（日本製）、欧米のヴィルトゥオーゾの奏でる神韻、マエストロのタクトが生む楽の饗宴で風流子を堪能させた。OSに出入りする映画ファンには馴染みの名店であった。

こいぬの北隣が丸山旅館。雪村いずみが宿をとったと伝わる。その先、料亭旅館つるや別館の脇に、稲荷山の末廣稲荷社に通じる路地。ここを右手に見て通りを進み、天麩羅「天とら」のあたりに至ると、折々三味の音も漏れ聞こえ、戦前遊冶郎であった者なら、裏町通の記憶を呼覚まされたはずである。裏町通は、関の廓として名高い稲荷町（いなりまち）の名を冠した通りと平行に走っていた。現在の本行寺門前筋[注22]が、その面影を微かに伝える。しかし、ここは、かつての裏町通そのものではない。戦前の西之端通が教法会館のすぐ東でカーブを終えると、そこからが裏町通であった。通りは東北方に向って、いま東華街のある区画を分断し、現在の北浦街道をまたいで伸びていた。稲荷町通は、現在の西之端通が街道に交わるあたりから、街道を斜めに横切るように、末廣稲荷参道の方角へと延びていた。57年当時には、稲荷山の麓に券番があり、節分の宝恵籠（ほえかご）が、ここから出て、亀山に参詣し、大和町方面へと練った。

こいぬ前を北進すれば、現在、路辺に弁天座の碑が見つかる。弁天座は、1873（明治6）年、中尾太郎が裏町に興した小屋で、1881年2月の火災から立ち直ると、新たに経営を託された重藤久勝の辣腕により、大正期には全盛期を迎えた。下関を訪れる一流役者が次々舞台に立ったことは語り草であったが、1941年には、阪急系の興行会社に買収され、下関宝塚劇場となっていて、戦災で焼けるまで続いた[注23]。

戦前の唐戸にあった他の映画館についても触れておこう。

いろは倶楽部は、OS劇場の東向いの位置に、1915（大正4）年に開館した。ここは1937（昭和12）年に赤間映画劇場に変わって、やはり戦災で焼失する。

いろは倶楽部と同年、遅れること4ヵ月にして東館（あずまかん）が建ったのはおおよそ現在の中之町郵便局の裏あたり。ここは、火災で焼けた翌年の1922年に、寿館として再出発する。戦中に下関日活館と改まったが、前2劇場と同じく焼夷弾で烏有に帰した。若草劇場に通う年配は、近くにあった寿館を懐かしんだことだろう。

OSの位置には戦後1947年、邦楽座（ほうがくざ）が開いたが、同名の館が1950年に竹崎（たけざき）の下関駅付近に開かれたため[注24]、元の邦楽座は下関東劇と改称されて、営業継続。これが経営に行き詰ってOSとなったのである。

焦土と化した唐戸の街地整備は、町の姿を大きく変えてしまった。そのなかで、若草とOSが唐戸の興行街の灯をつないだのだ。しかも、この2館は、いずれもOSチェーン系であった。

さて、OSから再び街道を北進しよう。奥小路（おくしょうじ）公園を過ぎ、幸町（さいわいまち）を抜ければ、急に細くなる街道の東側に大勝館（たいしょうかん）が看板を掲げるのが見えた。

大勝館が面する通りの一つ南の東西筋を街道から西に入れば、名画座があった。現在の、西中

国信用金庫唐戸支店の並び、清水建設下関営業所・平野内科あたりが跡地である。信金のある場所では、60年代になるとロマン座が興行していた。

大通りを目指し大勝館から西へ、醤油醸造元・大津屋があったあたりには、明治20年代に大黒座という芝居小屋がかけられていた。大通りへ出ると、交差点の中央には田中川が流れている。通りを横断して南下すると、山陽映画劇場前に至る。劇場前の交差点は舗装も貧弱で、塵埃と泥濘が通行人に容赦なかったし、信号もなく、交通取締が行われることもあった(注25)。劇場近所にOSチェーンの画工部が事業所を構え、そこで映画看板を制作していた。山映に隣る五穀神社の前に三角形の田中公園があるのは今もかわらぬ。

公園から南に歩んで西之端に至れば、広島相互銀行下関支店が角に見えた。そこを行過ぎるや、市庁舎が完成してより2年目の壮麗な外貌をあらわした。この建物は、1951年のコンペで優勝した田中誠ら、前川國男建築設計事務所スタッフによるデザインが、核となっていた。横連窓の上下が、レンガ張りの壁に仕切られ、シンプルで引締まった印象を与える8階建。8階部分は望楼風であり、その一部に乗りかかるように、展望用塔屋が設けられていた(注26)。この高層棟（本庁舎本部棟）につながり、タテヨコの対照をなす議会棟（地下1階、地上3階）は、随分後年の増築である。予算不足により、議会棟に含まれるはずだった正面入口と市民広間は、仮設の木造ポーチで代用されていた(注27)。本部棟の南西には委員会棟が建設中で、1958年に竣工を迎える。

相銀をよぎり、庁舎を左にするように道を折れると、公務員で賑わったバー「マロニエ」があり、直進して、田中川が暗渠になるところをよぎれば、異様な廃墟があらわれた。下関米穀取引所の建物が戦災を蒙ったまま放置されていたのだ。1902（明治35）年築の3階建。下関最初のレンガ造洋館であった(注28)。ドームの鉄骨と赤レンガを風雨にさらし(注29)、庁舎に出入りする市民の顰蹙を買っていた。関門商品取引所は、1953年から、庁舎の南で日本三大砂糖取引所の一つとして華やいでいて、廃墟とは対照的であった。なお、砂糖取引業者といえば、戦前から羽振りのよいもので、春帆楼などの高級料亭に芸者付きで上がったものだという(注30)。（続稿へ）

1　1907（明治40）年建築当初は宮崎商会であった。貝島炭鉱の所有に帰した際には、貝島倶楽部（貝島別館とする資料もあり）として社交の場となり、戦災にも耐えた。戦後個人にわたり、日生、資生堂を経て、1970年より2008年まではロダン美容室として親しまれた。現在は医院。すでに1957年当時この裏にある噴泉湯は、今なお営業している。

2　1922（大正11）年建。鉄筋コン3階建。両側の建築に比して個性に欠けるが、①ファサード両側の柱上にとりつけられた象鼻、②縦長矩形窓が外壁面より奥まって設けられ、3階窓の「まぐさ」の上方には軒蛇腹を施すこと、③2階窓と3階窓との境に見られる色違いの壁面のアクセント、④「下関商工會議所」とある扁額型レリーフがファサード上方3階窓のうえに見られる、などが特色であった。現在建物はなく、駐車場になっているが、フェンスの土台に「下関商工會議所」の銘が遺る。

3　1924（大正13）年建。当初は中庭を挟んで北棟があり、田中川の向うにも施設があった。57年当時、西之端局舎は市外局舎であり、市内局舎は西南部にあった。西之端局舎は下関市福祉センター、下関市庁舎第一別館を経て、現在は近代先人顕彰館、通称田中絹代ぶんか館。

4　『「夕刊みなと」』1958・8・30

5　『下関市年鑑』昭和39年版p.440

6　市史赤表紙版「市制施行以後」篇p.438-439。大阪との長距離即時通話とは、下関局管内から103を回し、小倉局の交換手が出たら、「大阪X局の〇〇番へ。下関の△△番」のようにいうと、受話器を持ったままで、目的の番号につながるというもの。この即時通話が可能になる以前は待時通話であった。長府交換局管内への半自動即時通話とは、080を回すと長府交換局の交換手が出るというもの。完全な自動即時化には1962年まで待たねばならなかった。58年に開通した下関局管内からの半自動即時通話網については、安岡・吉見・勝山・山口へも同様のパターンでかけた。

7　当時のものは建設省管理の緑地帯といっていい。ここから東を見ると、道路に沿う商店街の庇屋根の上に若草劇場の看板が目に入った。

8　時計板は3面設置され、上部にラッパのような拡声器がついていた。台形のコンクリート製基部上に円筒が立てられ、その上に時計板が載っていたから、まるで灯台のように見えた。

9　正方形のブロック片にトもしくはイのカタカナが浮出るように刳貫きがあるものを6つ、横一列に組みあわせていた。

10　「夕刊みなと」1957・1・8。同様のことは新築成って2年目の市庁舎でも起こっていた。トイレは殆どドアのノブ・かけ金がない状態だった。他にペーパーホルダー、衣類用フック、灰皿が紛失した。いずれも金属泥棒の犯行である。

11　1958年版善隣住宅詳細図では空家。1958年12月から68年5月まで派出所になる。63年の新聞記事がきっかけとなり、保存問題が市議会で取り沙汰され、解体の難を逃れて、70年から86年までは考古館として使われた。のち文化財として保存されるに至る。

12　関門海峡汽船の場合、唐戸発4時40分便、小倉発4時15分便があった。関門汽船には4時発便があったか。

13　戦前「下関市唐戸魚菜市場 鮮魚部」と称していたが、1950（昭和25）年「下関（市）中央市場」がオープン。海側の棟では「唐戸魚市場株式会社」が請負業者となって魚市場を開いた。唐戸魚市場の名称は、漁港の下関魚市場・下関中央魚市場と区別した呼び方ともなり、地元で一般的に通用した。「下関市中央魚市場」という称呼は漁港の市場と紛らわしい。なお唐戸の中央市場は、中央卸売市場法に該当する市場ではなく、県知事の許可のもと下関市が開設したものである。

14　現在の南部町駐車場の西のエリア、ナフコの向いあたり。なお唐戸の卸業者はいずれも午前9時あたりに閉店するところが多かった。

15　行商たちの中には集団でオート三輪を雇い、荷物だけ下関駅から唐戸まで運ばせ、自分たちは路面電車やバスに乗る移動方法をとる者もいたという。なお「荷物専用車」の称は当時の新聞に見えるが、「婦人専用車」というような称で記憶する市民もいる。

16　「夕刊みなと」1957・10・3

17　元は「下関市唐戸魚菜市場 青果・バナナ部」と呼ばれた。1950年「下関（市）中央市場」となる。五十年代末、亀山側の1号棟には青果卸売人売場、交差点側2号棟には青果仲買人売場・付属営業人売場があり、国道をはさんで、海側の四号棟にも青果市が立った。青果市場には九つの卸業者が入っていたが、1957年当時、国道トンネル開通と小倉市中央卸売市場開業が迫ったのを受け、下関市は業者を統一させて、唐戸青果市場の競争力強化を図ろうとしていた。なお青果市場の裏に殖産商事共同組合市場があって、30店舗が集まっていたが、1956年12月に火災に遭い、翌年2月22日まで魚市場内で仮店舗営業していた。中野書店の前にあった公設市場は、『しものせき市制百年 明治・大正そして昭和史』（毎日新聞下関支局編　1989年刊）p.270によれば、引揚者が中心となって立上げたものだった。筆者の聞くところでは、憲兵隊や伊勢安土地を核に自然と引揚者達が集まり、雑然と店を開いたのが始まりで、取締の動きとのせめぎ合いもあったという。天井の低い木造の施設一階部分に生鮮食料品店や飲食店が入った。新天地街道路をはさんで並ぶ南北2棟のいずれも2階建であったが、2階は梯子並みの急な階段でロフトにつながっていた。筆者が聞き得た例では、ロフトが2層に分かれていて、各層は床から天井まで大人の胸の高さくらいしかなく、各々2畳であったという。市場2階は居住空間であって、窓を開けるとアーケードの天井がすぐそばに迫っていた。市場北棟には「バー山」、「喫茶 窓」、軽食の「御多幸」、南棟には「百升」といった飲食店も入った。

18　市場ビルの第１棟は神社の敷地内にあったから、1976年に市場が勝山へ移転した後、神社はビル屋上を駐車場に利用することにした。そのとき行ったビル検査の結果、十分な強度が証明されたという。籠寅組による1933年完工の名建築であった。第１棟の屋上には三角屋根のような構造物があって、明り取窓が取り付けられた。地下はバナナの室であった。

19　若草通りから狭く緩い階段を上ると、ホテルの建物が現れた。ホテルといっても、実は風情に溢れた造作の和風旅館で、来関する劇団の宿泊にも理解を示した。ここの姉妹店が御裳川別館であった。

20　現在の紅葉館である。ここの丘上に洋館が建てられ、赤間関電信局技師が住みだしたのが1873（明治６）年４月のこと。1885（明治18）年９月には、赤間関商業講習所初代所長・中村英吉が洋館の住人となった。彼こそが「紅葉館」の名づけ親であった。庭にあった大木の紅葉にちなんでのことだ。しかし翌年４月に中村が退任して、洋館を去り、11月からアップルトンなる人物が居住した。宮市教会から来た宣教師で、同年、上田中町に下関バプテスト教会を開いた人である。年数が経過し、1908（明治41）年、ホームリンガー商会が同地に木造平屋の宿舎を設け―相当の利益をあげた商会が利用に供したことと、写真に残る壮麗な構えから推して、新たに建てられたと見る―紅葉館の名を継承した。最初の居住者はネール・ブロディ・リード。テノール歌手・藤原義江の父である。彼はホームリンガー代理店瓜生商会の支配人であった。1936（昭和11）年、シドニー・アーサー・リンガーが息子のため鉄筋３階建て「臨峡館」を紅葉館の向いに建設。昭和40年前後に、かつてリードが住んだ木造は老朽化を理由に解体され、その称「紅葉館」は臨峡館に受け継がれた。つまり現在の紅葉館―藤原義江記念館として公開されている建物―は、元「臨峡館」である。現在の紅葉館は、戦前いつのころからか英国代理領事邸となっていた。戦争勃発により代理領事は去るが、1952年、門司に開設された事務所に代理領事が赴任すると、再び代理領事邸となった。1957年当時、丘上の新旧洋館の主であった代理領事は、ここから門司まで通っていたのである。紅葉館のそばにプールがあって、イギリス人が優雅に水浴を愉しんでいたが、紅葉館は屋根瓦もボロボロで雨漏りもひどく、利用に供されている風はなかったという。紅葉館解体にともない生じた瓦礫は、このプールの埋立てに使われた。

21　唐戸本通・唐戸新天地には、1959年の時点では既にアーケードが設置されていた。唐戸本通り〈銀天街〉には57年当時、現在の「豆のありよし」、バッグ・袋物の「ゑり正」、洋菓子の「三好屋」が既にあったほか、「宝文具（支店）」「岡村美術品店」「喫茶ヤギ」等があった。「ヤギ」はマスターが文化・芸術面での理解に富んだため、ギャラリーとしても機能するなどハイソなムードが漂っていた。和風喫茶で、珈琲・あんみつは勿論のこと、釜飯・鍋焼まで出した。「岡村美術品店」は主人が茶道に通じ、関門における書画骨董の名店であった。新天地街では公設市場にあった音楽喫茶ローヌが有名であった。ここのマスターは57年２月３日午後１時よりアルトゥーロ・トスカニーニ追悼レコードコンサートを行っている。他には料亭「つるや」、大衆食堂の「六三四食堂」などが往年の名店として挙げられる。なお中央通にはアーケードがなく、赤間本通では歩道部分にだけ屋根が設けられた。

　OSのあった区画の一隅には、既に「みやこ人形店」があって、やがてレコード「快音堂」の支店も開いた。

　『しものせき市制百年　明治・大正そして昭和史』p.251-252によれば、もともと、幡生・安岡・吉見あたりから魚菜を持ってきた人が帰りにする買物で賑わったのが、この一帯の商店街であった。

　高度経済成長期の唐戸商店街では、朝は早いところでは卸市場に合わせて６時頃から、夜は８時、遅いところでは10時頃まで店を開けたという。店主家族は店の上に住んでいたから、長く店を開けるのに抵抗がなかったらしい。そうなると客が店のよろい戸を夜更けに叩くこともあったわけで、1957年のことではないものの、大晦日遅くに店を開けさせて、軸物を買っていった客がいた話を、岡村美術品店で聞いた。

　ちなみに当時の唐戸の劇場は、おおむね朝は10時台から上映し、夜は２本立ないし３本立の最終作品が９時台に上映されて、終幕後、夏ならナイトショーがはじまった。商店街の人たちには夜の上映が重宝した。

22　本行寺脇のバー「ハクスイ（スリーエー）」の近くに、小さな飲食店が集まる東華街と呼ばれたエリアがあった。大和町ガード下の西華街と対をなす呼び名である。東華街には現在も海鮮居酒屋「魚正本陣」

やスナックなどが集まる。

23　市史赤表紙版「市制施行以後」篇。以下戦前の記述は同資料p.547-549による。

24　竹崎の邦楽座は、1959年の火災による閉館後、大和町の映画館「有楽座〈ゆうらくざ〉」や竹崎のパチンコ店「永楽〈えいらく〉」「幸楽〈こうらく〉」の読み方にひかれて「ほうらくざ」と呼ばれるようになったのであろう。劇場のあった通りは現在、邦楽座通と呼ぶが、読みを「ほうらくざどおり」とする人が多数を占める。通りの読み方も含め「ほうらくざ」派は年配の世代にまでも蔓延しているようだ。そうしたことを受けて下関市の広報誌『０８３』第９号でも「ほうらくざ」と読んでいる。しかし邦楽座は、東京丸の内にあった松竹系映画館と同名で、そちらは「ほうがくざ」であった。唐戸の邦楽座で舞台実演があったと同様、竹崎に開館した同名館も松竹から東西大歌舞伎を招いて人気を博した。のちには松竹の資本が入り、館名「松竹邦楽座」となる。ご本家の松竹直営劇場が「ほうがくざ」なのに、下関を「しょうちくほうらくざ」とは読むまい。また、『キネマ旬報』58年10月上旬号「新・盛り場風土記」下関編に掲載された写真では、劇場壁面にローマ字でHogakuzaと見える。よって正しくは「ほうがくざ」である。

25　「夕刊みなと」1957・10・５。なお五穀神社の鳥居脇の一際大きな玉垣に刻まれた氏子の名は、1951年以来三期にわたって市長を務めた福田泰三と山陽映劇・みなと映劇などのオーナー今村巽である。

26　これとは別に７階にある屋上に手すりとベンチが設けられ展望できるよう配慮されていた。

27　田中誠「下関市庁舎　当選案から実施段階における諸問題」『建築雑誌』1966・11

28　和洋折衷のユニークなデザインである。往時の建物正面外観を紹介する。建物はファサード付き２階建てに３階建ての棟がつながっていた。ファサード真上には、中央の小円柱をはさむ対のアーチ型窓があり、２つのアーチ上部を左右からはさむように、大きな持送りが一対、軒部に見られた。対のアーチ型窓をはさんで矩形窓があり、矩形窓の上辺に接して凸状の装飾的構造物をとりつける。この２階建ての屋根には、頂部がアーチ状のペディメントを備えていた。ペディメントの真上には宝塔様の飾りが見えたほか、ティンパヌムに浮彫を施す。ファサード上方に望める３階建て屋根のてっぺんには、高欄を巡らした望楼を設ける。またファサード付き２階建て部分の正面から右側にある３階建て棟には、３階に縦長矩形窓とバルコニーが認められ印象的であった。1957年当時残っていたのは、この３階建て棟と、その東側につながる２階建て棟であって、地権者は民間の病院。

29　『亀山叢書』中、『馬関首絵』p.15 中原雅夫筆

30　『しものせき市制百年　明治・大正そして昭和史』毎日新聞下関支局編 p.252

このたびの研究にとりかかった最初の段階から、数々の貴重な証言を下さった武部忠夫氏、高度経済成長期の市街地の様子を詳細に語って下さったのみならず、続稿で紹介する戦後の映画館の現在の様子を、写真に収めて提供して下さった植田勝義氏、館務の合間をぬって貴重な資料を見せながら懇切に御教示下さった「松永文庫」室長の松永　武氏、大映九州支社で活躍された折の興行界の慣習をお話し下さり、地方都市における興行についての資料を紹介して下さった中島　賢氏、地域史関連資料の数々を御教示下さり、閲覧の便宜を図って下さった安冨静夫氏、かなり長文にわたる御手紙で戦後映画興行の実態を御教え下さり、貴重な資料まで下さった古川　薫氏には、格段の感謝の意を表したい。

なお唐戸界隈について書いた本稿の執筆には次の皆様の御教示・御協力を得た。ここに深謝申し上げる。

岡﨑唯裕　岡村芳雄　佐藤睦子　末国和子

竹中恒彦　徳満栄子　富田義弘　野村忠司

水野直房・三塩明美　（敬称略）

㈱サンデン交通　新道鮮魚店　吉田メディカルクリニック

＊本稿は1957年当時の新聞・雑誌、写真資料、証言を比較検討しながら書いたが、当然誤認や事実との齟齬が混じっているはずである。読者各位より御批正賜りたいところである。